



Title	月刊DRF 第53号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2014-05-30
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/73606">http://hdl.handle.net/2115/73606</a>
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; <a href="http://drf.lib.hokudai.ac.jp/">http://drf.lib.hokudai.ac.jp/</a> で公開したもの
File Information	DRFmonthly_53.pdf



[Instructions for use](#)



# 月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

## 第53号

No.53 June, 2014

- 【特集】平成26年度新体制お披露目
- 【速報】OpenAIRE-COAR Conference 2014報告
- 【連載】かたつむりとオープンアクセスの日常

平成26年度のDRF運営委員と企画ワーキング・グループが決定しました。今年度の体制をご紹介します！（企画ワーキング・グループは4ページ）

### 新体制お披露目第1弾！ 平成26年度DRF運営委員ご挨拶

#### 運営委員長挨拶



DRFは、リポジトリ担当者コミュニティとして平成22年以来活動を続けてきました。昨年の学位規則改正による博士論文のインターネット公表は、機関リポジトリの重要性を改めて認識させるとともに、DRFがこれまで取り組んできた情報共有やノウハウの継承といった活動が十分に活かされた事例でした。

今後は「機関リポジトリ推進委員会」との連携を進める必要がありますし、国際連携の在り方も検討しなければなりません。機関リポジトリの発展とオープンアクセスの促進のために、皆様とともに努力してまいりたいと考えております。

デジタルリポジトリ連合運営委員長・北海道大学附属図書館長 新田孝彦

#### 新任・再任委員挨拶

杉田 茂樹（千葉大学）



今も全国各地で機関リポジトリが立ち上がりつつあるとのことで、計画中的のものも含めるとその数は400を超えると聞きます。「はじめてこの仕事に携わる」人というのがひょっとしたら毎年100人ぐらいいらっしゃるわけで、実務のちょっとした疑問など、DRFのメーリングリストをどんどん活用してもらえたらいいなと思います。

（ときどき小難しい話題が流れますが、小難しくない話題で押し流しちゃいましょう！）

高橋 努（広島大学）



この度縁あって広島大学図書館に着任し、DRF運営委員を務めさせていただくことになりました。DRFでは新人ではありますが、わが国の機関リポジトリの発展に、少しでもお役に立てるよう努めてまいりたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

鈴木 正紀（文教大学）



運営委員を引き続き務めることになりました。職場の責任者になってしまったことで、今はなかなかリポジトリの業務に注力することができていませんが、DRF

が各地でワークショップを開いて、リポジトリ普及に努めていたころのことを知る人間として（あのころの「熱気」に煽られ励まされ、自分も頑張ろうと強く思ったことを記憶しています）、リポジトリ「運動」の活性化に微力ですがお役にたてればと思っております。よろしくおねがいたします。

#### 平成26年度DRF運営委員一覧

- 委員長 新田 孝彦（北海道大学）
- 井上 修（大阪大学）
- 内島 秀樹（神戸大学）
- 杉田 茂樹（千葉大学）
- 鈴木 雅子（静岡大学）
- 鈴木 正紀（文教大学）
- 高橋 努（広島大学）
- 森 いづみ（お茶の水女子大学）

## OpenAIRE-COAR Conference 2014報告

5月21-22日にギリシャのアテネで開催された「OpenAIRE-COAR 2014 Conference」に参加させていただきました。

今回のカンファレンスのタイトルは  
“Open Access Movement to Reality  
: Putting the Pieces Together”

です。ヨーロッパでもまだRealityが無いのかな、などと思いながらギリシャにむかいました。タイトルの後半は、「様々なピースをあつめて、オープンサイエンスのインフラを構築しよう！」という趣旨です。

今回のカンファレンスのキーワードは

「Open Science」でしょうか。「research data sharing」や「research data management」という言葉もよく耳にしましたし、論文アクセスから、リサーチデータのシェア（アクセスでなくシェア）に大きく舵を切り、その実現のために、スキームの再構築がはじまっているようで、講演を聞いていても“新しいスキームを作るんだ！”という熱意が端々で感じられました。



カンファレンス会場の様子

カンファレンスは以下のセッションにわかれています。

- 1) Aligning Repository Networks
- 2) Research data: the institutional context and beyond
- 3) Maximizing the exploitation of open research results through text mining
- 4) The impact of openness and how to evaluate research
- 5) The now and the future of open scholarly communication

ピースとして想定されているものは、リポジトリだけでなく、研究データ、学術情報発信、研究評価、テキストマイニングなど多様でした。

またヨーロッパばかりでなく、SHARE（北米）、RED CLARA/LaRefuerencit（ラテンアメリカ）、World Bank（発展途上国中心）などの地域のリポジトリネットワーク組織からの発表もありました（JAIROも呼んでよ、と思いながら聞いていました）。



コーヒーブレイク

全般を通してですが

1) OpenAIREの親プログラムであるFP7が終了しOpenAIREも終了すること。FP7の後継のHorizon 2020が2014年1月よりスタートし、そのなかではOAについて、かなり突っ込んだ言及がされているようで（恥ずかしながら未確認ですが）、それに合わせるかたちで、スキームを組み替えている段階らしく、抽象的な話が多い印象がありました。

2) オープンサイエンスと言っても、具体的な実装がどうなっていくのかは、あまり見えてきませんでした。ただ、いたるところでzenodo（CERNとOpenAIREplusプロジェクトが構築したリポジトリシステム）がでてきましたし、そこに集約されていく可能性は高いので、その動きはフォローしておくべきではないかと思えます。

3) 全般的にファンドへの意識が強く、研究成果とファンドとのリンク付は当然のことと考えられているようです。研究評価、統計も「ファンドの視点」が普通に意識されていますし、この点は日本は遅れているので見習いたいな、と思いました。

最後に感想です。OA関連の国際会議に出席するのは初めてで、かつ、おそらく日本からの出席は一人だけでした。出席してみると、いたるところで「久しぶり！」とハグをしている光景が見られましたし（アウェイ感いっぱいでした）、OAのmovementを支えているのは、日本でも海外でも、結局は人のネットワークなんだな、と強く感じました。日本としても継続的に参加し、ネットワークを繋いでおく（顔を繋いでおく）ことは大切だと思いました。



会場の新アクロポリス博物館はアクロポリスの間近でパルテノン神殿もみえました。

スタッフのみなさん





30% of students write a report only with reading literature published online.

「かたつむりとオープンアクセスの日常」と題している割にはあまり著者の日常生活は感じさせない当連載ですが、今回は割りと自分の日常に関わるお話です。言い換えれば、宣伝です。

自分が勤務している同志社大学の司書課程には、「図書館演習」という通年科目があります。受講生は履修期間中のどこかで図書館の現場実習を行なうとともに、図書館情報学関係の英語論文の輪読と、何か一つ研究テーマを決めたグループワークが課せられる、というユニークな科目です。年にもよりますが、昨年度は90人弱の学生が履修していました。

学生が取り組んだグループワークのうち、結果が面白かったものは教員の手も加えて、司書課程の紀要に掲載しています。昨年度は3本の論文が掲載されたのですが、そのうちの1本が今回紹介する「質問紙調査に基づく大学生のCiNii Articles 利用行動の分析」です<sup>[1]</sup>。これは同志社大生のCiNii Articlesの利用実態、特に「CiNiiで手に入らない文献があったとき、学生はどうするのか」を明らかにしようというもので、自分から学生に提案してやってもらっていたテーマでした。

テーマ設定のもともとの契機は、2012年に『本棚の中のニッポン』の著者、国際日本文化研究センターの江上敏哲さんと、『越境する書物』等の著者、早稲田大学の和田敦彦先生の間で行なわれたトークセッションに参加してきたことでした。セッション自体は海外における日本研究資料について、また海外の日本研究者に如何に必要なコンテンツを届けるかということテーマにしたものでしたが、その中で「日本の研究系論文のデジタル化がいびつな形になっている」ことも話題になりました。「学生たちは研究論文を探して、デジタル化されたものだけ引用する。そうなることとんでもない論文ができあがる」、「初学者はデジタル化＝ステータスと思う」といった発言が和田先生からありました<sup>[2]</sup>。和田先生ご自身が人文系の研究者であることとあわせて考えれば、これは人文学分野において、紀要論文のデジタル化は機関リポジトリによって進んでいる一方、学会誌のデジタル化は進んでいないという一種の逆転現象の弊害を指摘したものでしょう。

しかしこれらの発言はあくまで和田先生ご自身の経験・印象に基づくもの。実際のところ、学生はデジタル化されたものだけ使って、論文やレポートを書いたりしているのだろうか？ まずはその実態を調べてみたい...ということで前述のテーマを設定したわけです。さらに話をCiNii Articlesに限定したのは、もともと自分がずっと研究対象にしていたことや<sup>[3]</sup>、以前にメンテナンスのためCiNii Articlesが止まったときにTwitter上で多くの学生から「卒論が...！」という声が上がっていたこと等も理由でした<sup>[4]</sup>（もっとちゃんとした理由は、ぜひ論文を見てみていただければ幸いです）。

さて気になる調査結果ですが、235人の同志社大学生に質問紙を配布し、そのうちCiNii Articlesを利用している139人（ほとんどは人文社会系の学生）に、レポート等で必要な文献をCiNii Articlesで見つけたものの、本文へのリンクがなかった場合の対応を聞いたところ、「本文が入手できる論文のみを利用する（入手できないものはあきらめる）」

とした回答者は31.7%（45人）でした。他に比較対象がないのでこれが多いのか少ないのかは判断できませんが（現在、範囲の拡大を検討中です）、少なくともオンラインで手に入るものだけでレポートや論文をなんとかしようとする学生がいたことは確かなわけです。しかもこれは教員が責任者となっている質問紙に対する回答ですので、正直に答えているかどうかは定かではなく、本当はもっと多くの学生がネットで見た文献だけでレポートを書いていることも考えられます。

一方で、そもそもCiNii Articlesだと使えそうな文献が見つからなかった、というときにそれ以上の探索をあきらめるといふ学生は5%もいませんでした。何かしらの文献が手に入らなければレポートの書きようがないので図書館に行ったりして探索を続ける、しかし何かしら手に入るものがあればそれだけで書き進めることもある、ということのようです。

もちろん、これはあくまで「オンラインで手に入るものだけで書くことがあるのか」ということを調べただけで、和田先生が言うようにその手に入れたものが不適切なものかどうかはわかりません。それはこれから別の手法で調べていこうと考えています。それはそれとして、オンラインで手に入らないものも見よう、というリテラシー教育も進めていく必要はあるでしょうが、しかし水は低きに流れるもの。どれだけ教育してみたところで、忙しい学生生活の中で常にオンラインで手に入らないものも見よ、と徹底するのは難しそうです。それよりは、学会誌の電子化こそ早く進めていきたいところなのですが、さてそれは誰が担っていくのか...というのは、また今回の調査とは別の話。

そんな感じで、今回は日常的にもオープンアクセスや機関リポジトリに関する話題に学生と取り組んだりしているんですよ、という宣伝でした。大学受験を考えているお子さんをお持ちの方、もしOAエリートに育てていきたいのであればぜひ同志社大学への入学もご検討を！（笑）

[1] <https://www.dropbox.com/s/o11arz2q6imfttz/1-%E4%BD%90%E8%97%A4%E7%BF%94%E3%83%BB%E6%A3%AE%E4%BB%81%E6%A8%B9%E3%81%BB%E3%81%8B.pdf>

[2] <http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/20120715/1342367501>

[3] <http://hdl.handle.net/2241/118741>

[4] <http://togetter.com/li/401849>



佐藤 翔

同志社大学社会学部教育文化学科助教。  
ブログ「かたつむりは電子図書館の夢をみるか」  
（<http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/>）管理人。

## 新体制お披露目第2弾！ 今年の企画ワーキング・グループです

企画ワーキング・グループ（WG）では、新年度を迎えてメンバーの入れ替えがありました。昨年度より副査を一人増やし、主査一人、副査三人としました。WG一丸となって、色々なDRFの企画を進めて行きたいと思います。

DRFの主役は参加機関のみなさまです。活動事例やお悩み解決などの情報共有を進める場としてDRFを活用していただき、みなさまの機関リポジトリを発展させていきましょう。

### 平成26年度DRF企画WGメンバー一覧

主査 三隅 健一（北海道大学）  
副査 大園 岳雄（香川大学）  
" 西菌 由依（鹿児島大学）  
" 松本 侑子（広島大学）

川村 拓郎（広島大学）  
小村 愛美（神戸大学）  
佐々木 翼（北海道大学）  
佐藤 翔（同志社大学）  
佐藤 恵（東北学院大学）  
杉山 智章（静岡大学）  
武内八重子（千葉大学）  
中谷 昇（鳥取大学）  
林 和宏（名古屋工業大学）  
三角 太郎（千葉大学）  
守本 瞬（金沢大学）

### 企画WGでは、みなさまからのアイデアをお待ちしています！

「こういうことで困っているんだけど...」  
「新しいことを始めるにあたって、ほかのリポジトリでどうやっているか知りたい」  
「近くの機関で相談できる人がほしい」  
「学内ワークショップを開きたいけどどうしたらいいの？」  
「新しいことを始めたから、みんなに知ってほしい！」、etc.

### お気軽にご連絡ください！

※ご連絡先：[drf-info@lib.hokudai.ac.jp](mailto:drf-info@lib.hokudai.ac.jp)  
(DRF事務局：北海道大学附属図書館学術システム課気付)

2年目です。「いつもの月刊DRFだし気軽なコメントにしよう」と考えていましたが、副査の方々からきちんとしたコメントが届いていました。DRFの活動の主眼は情報共有ですが、メーリングリストや集会イベント、勉強会など、色々なチャンネルを用意して盛り上げて行きたいと考えています。1年間よろしく願いいたします。



(主査・北海道大学 三隅)



(副査・鹿児島大学 西菌)

機関リポジトリと一口に言っても、それぞれ異なる個性や経験を持っています。うまくいった経験はもちろん、うまくいかなかった経験も、きっと誰かの役に立ちます。これからのリポジトリを、みなさんでよりよくしていけたらと思います。

DRFでは主に機関リポジトリの研修やワークショップに携わってきました。膝を突き合わせて語り合える機会はもちろんのこと、その場に居合わせることができなかった人たちへのフォローアップができるような企画も提供できればと考えています。機関リポジトリについてのノウハウだけではなく、悩みや不安を共有し、解決の糸口を見出す場がDRFです。これまでがそうであったように、これからも実りあるコミュニティを共に育てていきましょう！



(副査・香川大学 大園)



(副査・広島大学 松本)

DRFの主役は参加機関のみなさまです。それはつまり、みなさまの声次第でどんな方向にも活動の幅を広げられる、大きな可能性が秘められているということだと思います。若輩者ですが、みなさまからお力をいただきながら、その可能性を引き出すお手伝いができるよう精一杯務めさせていただきます。

### 次号 予告

[特集1] 平成26年度第1回学術情報基盤オープンフォーラム 参加レポート  
[特集2] Open Repositories 2014 参加レポート  
[連載] ここにあるオープンアクセス

月刊DRFでは、皆さまからのお便りをお待ちしています。  
[gekkandrf@gmail.com](mailto:gekkandrf@gmail.com)

読者アンケートにご協力ください。  
[http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf\\_ing.html](http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_ing.html)



<http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation>

### 編集後記

初夏の陽気がまぶしいこの頃、また貴重資料の湿気と戦う夏が始まります.....  
(三松)